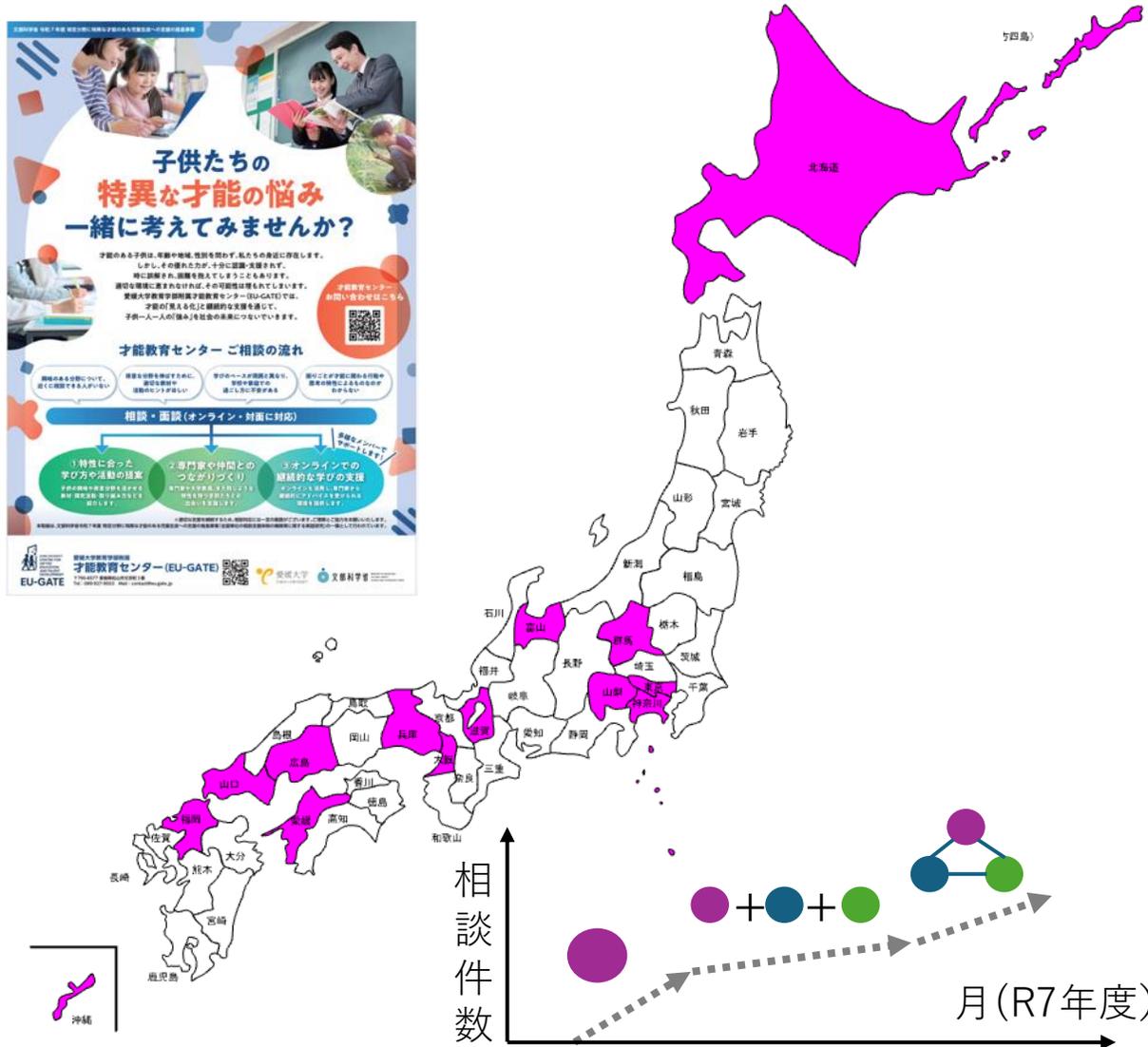


2026.3.24 第7回教育課程部会 特定分野に特異な才能のある児童生徒に係る特別の教育課程ワーキンググループ

多様な才能を包摂する相談支援と柔軟な教育接続

愛媛大学 隅田学

特異な才能のある児童生徒は年齢や地域を問わず存在し、その才能に気づき、悩みを抱え、信頼のある情報や相談の場を求めている



R7年度文部科学省「全国単位の相談支援体制の構築等に関する実証研究」
愛媛大学教育学部附属才能教育センターへ寄せられた相談対象の属性等

- 相談対応件数：延べ71件
- 相談対象児童生徒等数：49名
- 年齢：幼児～高校生等（小学生が最多：27名）
- 相談が寄せられた都道府県：北海道、東京、神奈川県、山梨、群馬、富山、滋賀、大阪、兵庫、広島、愛媛、山口、福岡、沖縄（14都道府県）
- 保護者・教員・教育委員会等からの相談



特定分野に特異な才能のある児童生徒を包摂する指導と支援の基本的な考え方に沿った相談支援と教育接続の整備へ向けて

特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議。(2022). 特定分野に特異な才能のある児童生徒に対する学校における指導・支援の在り方等に関する有識者会議審議のまとめ

- 「児童生徒を特定の基準で選抜し特別なプログラム等を提供することを目指すのではなく、才能のある児童生徒を含む全ての子供たちが多様性を認め合い、高め合える指導・支援の在り方を考えていくことを基本的な考え方としている。」 (p. 3)
- 「困難に着目し解消を図るとともに個性や才能を伸ばす」 (p. 19)

※学校現場が分断されたり、特異な才能のある児童生徒が差別対象となったりしないよう留意

重要な焦点は、「誰を対象にするか」ではなく、特異な才能に係る支援ニーズへの理解と多様性を包摂する柔軟な教育環境をどう整えるか

なぜ特異な才能に係る相談支援体制が必要か？

従来の相談窓口だけで解決する？

学校における支援体制の構築・授業改善、ならびに継続支援へ結び付きにくい。

相談に寄せられた声

- ・ 子供の話を聞いてはくれるが、それ以上のことがないので、学校や授業に係る困難が解消されず、状況は改善されない。
- ・ 担任の先生に何をどこまでお願いして良いかわからない。
- ・ (学校側として) 何をどこまで対応するのか判断しづらい。

学びの伸びしろ？困りごと？

学習面の可能性と生活・心理面の困難が併存し、対応にばらつきが生じやすい。

相談に寄せられた声

- ・ 物事の全体像をつかむのが早く、数字やパターンが得意。人の表情や場の空気を読み取るのが苦手。
- ・ 俳句は地域の新聞に何度も掲載されている。学校行事での司会や放送委員のアナウンス、音読では褒められる。感情のコントロールが苦手で不安感が強い。
- ・ (学校でできる) 「強み」の支援の仕方についてイメージができない。

問題は、悩みや相談そのものがないことではなく、
学校における支援体制の整備や授業改善、継続支援に結び付きにくいこと

愛媛大学教育学部附属才能教育センターの取組

(1) 相談支援体制の整備

—学内外の連携により、支援の多様性・専門性・継続性を担保する—

愛媛大学教育学部附属才能教育センターの設置 (2025年4月1日)

学内メンバー17名（才能教育、特別支援医学、社会科教育、特別支援心理学、国語科教育・言語学、教育実践学、英語科教育、スポーツ教育学、技術科教育、理科教育・生物教育、数学教育、幼稚園教育、小学校教育、中学校教育、特別支援学校教育、高等学校教育等）、特定研究員2名で構成



令和7年度文部科学省「特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業」
(1)学校と連携した学習・支援プログラムの提供及び評価の在り方に関する実証研究
(3)全国単位の相談支援体制の構築等に関する実証研究

<https://eu-gate.jp/>



相談

実践

発信

研修

才能のある幼年児向け特別教育の提供
「キッズアカデミア」2010年スタート。
キッズメンバー277名

<https://kids-academia.com/>

オンラインセミナーの提供
「ギフテッドアカデミア」2020年スタート。
フォロワー748名 (全国)

<https://gifted-academia.peatix.com/>



文部科学省 令和5年度
「特定分野に特化した
児童生徒への支援の
「研修パッケージの作成」

<https://eu-gate.jp/training-package/>



一般向けポッドキャスト
「ギフテッド・トーク・ジャ
パン」開設 (2026.3.10)

<https://x.gd/dKuT5>

国内外ネットワークの構築

— 大学間連携により、実践知の共有と支援高度化を推進 —

愛媛大学教育学部附属才能教育センターには、
国内外から10名の客員教授と2名の客員研究員が所属

令和7年7月：お茶の水女子大学サイ
エンス&エデュケーション研究所と
連携協力に関する協定を締結

→教材・自由研究等の知見を相談支
援に接続し、支援の選択肢を拡大

※協働でオンライン等でのメンタリング



愛媛大学教育学部附属才能教育センターとお茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所が連携協力に関する協定を締結

(令和7年7月4日)

客員教授・准教授



松村 暢隆
関西大学 (名誉教授)



Julia Link Roberts
Mahurin Professor, Western
Kentucky University



Rena Subotnik
Academic Talent Development
Program, University of California
Berkeley



石川 裕之
京都女子大学高等教育開発センター
(教授)



Heidrun Stoeger
Chair for School Pedagogy,
Universität Regensburg



Kimberley L. Chandler
Director of Curriculum, Center for
Talented Youth, Johns Hopkins
University



角谷 詩織
上越教育大学 (教授)



Jae Yup Jared Jung
Professor, The University of New
South Wales



Jiyoung Ryu
Director, Gifted Policy Center, KAIST
Global Institute For Talented
Education



Erkki Tapio Lassila
神戸大学人間発達学研究所 (助教)



新井 しのぶ
神戸大学教育学部 (講師)



吉川 あすか
小幡立三小学校 (講師)



Antonette Pawlien
(研究員)

客員研究員

学年： △ 氏名： 〇〇 × × 記入年月日： XXXX/Y/ZZ

考慮する点	具体的な内容
特異な才能を発揮する分野、程度	<ul style="list-style-type: none"> ・小学1年生の時に3けた同士の足し算を暗算で解いたり、$99 \times 99 = 9801$ $999 \times 999 = 998001$ と法則性があるねと言ったり、何かと何かをかければ必ず割れる数だねと、特に勉強中でない時でも親に言ってきます。 ・小学1年生時点では、自然数・整数・有理数・無理数といった数の分類や、面積、分数の四則演算、一次方程式などは理解しているようです。小学2年生の現在は、比例や一次関数、乗数、階乗、有理化などにも断片的に触れています。ただし、本人の興味に従って学んでいるため、小学校算数の中でも角度など未習・未理解の領域は多くあります。
学習上・生活上生じている困難等の状況、程度	<ul style="list-style-type: none"> ・感情のコントロール、気持ちの浮き沈み、不安感 ・身だしなみや整理整頓 ・「みんな」に合わせること ・感覚過敏
効果的な授業の工夫や教育支援	<ul style="list-style-type: none"> ・担任の先生は、共通した授業に加え、「何か見つけた法則がありますか?」と問いかけて発言の機会を与えてくださったり、他の友達が困っている場面で考え方を説明する機会を設けてくださったりしています。そのような関わりによって、本人の意欲や関心を維持していると感じています。
特に配慮を要する点	<ul style="list-style-type: none"> ・完璧主義なので、少しミスすると怒り出したり、自分で考えたいのにヒントを出されると嫌がる事があります。 ・興味のある内容については発言意欲が高く、楽しいと感じたことは感情や言葉にすぐ表れる傾向があります。そのため、結論を出すスピードが速い反面、慎重さを欠いてしまい、間違えることがあります。
学校外での学習状況 検定等の受験歴や進捗 がわかるような学習歴 (ある場合)	<ul style="list-style-type: none"> ・小学3年の時に算数検定3級合格
検査を行った経験 (ある場合)	<ul style="list-style-type: none"> ・WISC等の知能検査を受けた経験はありません。
周りの関係者リスト	<ul style="list-style-type: none"> ・家族(父・母・妹小3) 近所に祖父母 ・〇〇小学校 △年×組 担任 □□□□先生 ・〇〇小学校 こども発達相談室 △△△△先生 ・スクールカウンセラー ××××先生 ・××病院 精神神経科 〇〇〇〇医師

(2) 相談対応の「入口」の整備

特性記録項目のフォーマット化による見立て精度向上と効率化

■ 児童生徒の特性に関する簡易プロフィールの事前提出により見立ての精度が向上

■ 相談開始時に説明書・同意書を整備し、手続の透明性を確保

説明書及び同意書

愛媛大学教育学部附属才能教育センター(以下、EU-GATE)は、文部科学省による「令和7・8年度特定分野に特異な才能のある児童生徒への支援の推進事業(3)全国単位の相談支援体制の構築等に関する実証研究事業」を受託し、2年間の取組を行っています。

相談のお申し込みにあたり、以下の内容のご確認と同意いただけるものにチェックをお願いします。同意いただけない場合は、相談をお受けすることができません。なお、以下の内容について、ご本人及び保護者の方の同意なく個人を特定できる情報を第三者に提供することはありません。ただし、法令等に基づく開示要請があった場合を除きます。

- EU-GATEの事業運営のほとんどは、国費(運営費交付金等)において賄われています。そのため、相談件数や簡単な内容を報告書等として発表することがあります。また、個人が特定されない形で相談内容等を学術研究として使用することがあります。正確を期すため録音により記録をいたします。
- EU-GATEは年度ごとに文部科学省に委託事業の成果を報告します。そのため、個人が特定されない形で相談内容等を公開することがあります。
- オンライン面談による相談は無料です。学校等への訪問等でご負担をお願いする場合は、事前に説明をいたします。
- 上記委託事業において学校等との連携を図ることが望ましい場合、児童生徒等ご本人及び保護者の方の同意の上で学校等と情報を共有する場合がございます。しかしながら、ご家庭と学校等の関係構築がご本人のために重要であるため、ご本人及び保護者の方のご要望を一方的に学校等へお伝えするものではありません。
- EU-GATEにおいて、検査や診断は行いません。
- EU-GATEとして対応が難しいと判断される場合は、ご相談をお断りすることがあります。
- EU-GATEメンバーの本務等の都合により、やむを得ず予定や相談スタッフを変更する場合がございます。その場合は事前にご連絡をいたします。

チェックした項目について同意します。

令和 年 月 日

児童生徒等氏名： _____

保護者氏名： _____

(3) 相談対応の「入口」と「出口」の類型化

領域固有性

教材・指導法

心理・社会面

認知・行動特性

a. 興味のある分野について、相談できる人がいない

b. 強みを伸ばす適切な教材や活動のヒントがほしい

c. 学びのペースが周囲と異なり、過ごし方が不安

d. 困りごとが才能に関わる行動なのかどうかわからない

e. その他
(親子関係、進路相談、学級経営等)

子供を固定的な特性で分類するのではなく、状況に応じた支援可能性を確認し、次の方向性を明確にする。

	担当教員 a	教員による連携 b	外部専門家等 c
教室内 Type I	Type I a	Type I b	Type I c
学校内 Type II	Type II a	Type II b	Type II c
学校外 Type III	Type III a	Type III b	Type III c

相談・面談
(オンライン・対面に対応)

何に困っているか／何が伸びるか／環境のどこを調整すべきかを整理することが重要

選抜ではなく、学校内支援・外部資源・専門支援の柔軟で適切な接続につなげる。

参考 最近5件の相談案件に係る状況

- 学校に通いづらい・・・2件
 - 支援級所属・・・2件
 - ①に関するアドバイス5件
 - ②に関するアドバイス5件
 - ③に関するアドバイス1件
- ・学校の授業に係る助言
 - ・プラットフォーム紹介
 - ・教材紹介
 - ・専門学会紹介
 - ・コンテスト紹介

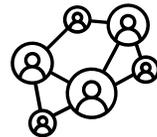
Contextual Support Matrix (CSM) (Sumida, 2026)

身近な学びの環境調整



① 特性にあった学び方や活動の提案

学びの環境拡大調整



② 専門家や仲間とのつながりづくり

学びの環境深化調整



③ オンライン等での継続的な学びの支援

(4) 相談から始まる、多様な教育接続

ベースライン調査結果から見た9タイプの現状予測

オンライン調査 二段階抽出：配信数：210,291人

第一段階：職業（学校／塾／予備校の教員／教育委員会／学校職員） 回答数：15,222人

第二段階：小学校教員 配信数：745人 回答数：531人（有効回答数：499人）

中学校教員 配信数：543人 回答数：396人（有効回答数：377人）

教室内 Type I	Type I a	Type I b	Type I c
学校内 Type II	Type II a	Type II b	Type II c
学校外 Type III	Type III a	Type III b	Type III c

図. 特定分野に特異な才能のある児童生徒を対象とした教育支援の類型化に関する本研究の仮説

	担当教員 a	教員による連携 b	外部専門家等 c
教室内 Type I	Type I-a 小: 69.7% 中: 56.8%	Type I-b 小: 61.7% 中: 51.7%	Type I-c 小: 50.7% 中: 39.5%
学校内 Type II	Type II-a 小: 55.7% 中: 44.3%	Type II-b 小: 53.3% 中: 42.2%	Type II-c 小: 46.9% 中: 34.5%
学校外 Type III	Type III-a 小: 40.1% 中: 31.8%	Type III-b 小: 39.7% 中: 29.4%	Type III-c 小: 38.3% 中: 28.9%

Q. 子供から授業中に質問されて自分がわからない時、どうしますか？

授業中に生徒と一緒に調べたり考えたりする	小: 83.2 % 中: 73.8 %
休み時間や放課後に生徒と一緒に調べたり考えたりする	小: 77.5 % 中: 62.1 %
次の授業までに教員が調べて答える	小: 82.2 % 中: 82.7 %
生徒自身に自分で調べたり考えたりするよう促す	小: 83.6 % 中: 74.0 %
難しいからわからないと受け流す	小: 21.6 % 中: 15.9 %

「ほとんどしない」「あまりしない」「時々する」「よくする」から一つを選択するよう求め、「時々する」あるいは「よくする」と回答した割合

学校内における指導・支援の例（1）

- 授業内での深まり・広がり・表現方法の選択肢を増やし、誰もが参加できる設計を進める。
- 特定の子供だけの「特別メニュー」ではなく、学級・学校全体の学びの質向上として実装する。

Type I-a: 理科「ものの溶け方」



①意図・工夫点：子供が気になる変数は教科書の例に留まらず多岐にわたる。そこで、マグネットスターラーを使い、実験時間を短縮し、自分自身が設定した問題を追求する時間を確保した。また、報告会を開き、成果を示す時間を設けた。

②子供の様子：理科に関する豊富な知識を持っている。授業中の指摘がするどく、科学的なものなのか、他に試す方法はないのか、そういった視点を持ちながら学習している。「もっとやりたい」「○○について確かめたい」とよく口にしている。

③子供の達成等：ペアで実験。まだ時間が足らず悔しくも満足げな様子。報告会では、自信を持って発表。普段は一人で黙々と他を寄せ付けない感じで、実際にグループで意見の対立も多かったが、今回の授業に関しては、相手の指摘に素直に応じて方法を検討し直すなど、協力しながら実験していた。

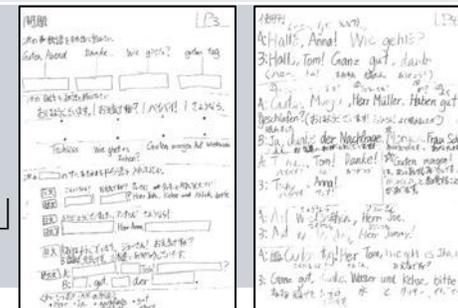
Type I-b: 休み時間の活用



①意図・工夫点：該当児童の関心が強いものに対し、教員が関心を傾け話を聞くだけでなく、それに関する具体的な行動を勧めたり、一緒に活動したりすることで、該当児童の満足感、充実感を高めることができる考えた。該当児童が言語に強い関心を持っていることから、他の教員も同席し、該当児童からドイツ語を教わることになった。

②子供の様子：単元や教科によって、既に知っている内容があるため、授業が楽しくないと感じることがある。興味関心のあることが同世代の友達と異なるため、会話が成立しないときや、友達が一步引いてしまうときがある。話すときも書くときも言葉遣いが大人びている。

③子供の達成等：興味関心を追究できる時間を確保することや、担任や他の教員にアウトプットすることで、本人の満足度を満たすことが多くなった。さらに、周囲にいる友達から「すごいね!」「さすが○君!」と言われ、とてもよい表情になった。



学校内における指導・支援の例（2）

- 教科外活動や学年横断活動を活用し、強みが見えやすい場を学校全体で用意する。

Type II-b: 総合的な学習の時間



①意図・工夫点：特定の児童の得意分野や問題意識を生かしながら、学級内にとどめず、学年全体の学びとして位置付けることを意図した。「企画力」をテーマに、学級を解体し、複数学級混合のグループ編成を行った。

②子供の様子：思考の回転が速く、他者の発言を即座に理解し、的確な意見を述べる。授業中に、学習の本質に迫る発言を行うことが多く、周囲の児童の理解を助ける場面が見られる。学習内容が本人にとって容易すぎる点もあり、授業に対する意欲が高まりにくい場面も見られた。また、休み時間には友達の外に入りにくく、一人で読書をして過ごす様子が多く見られた。運動面については苦手意識が強く、「運動だけで競う行事ではなく、自分の得意な学習面でも力を発揮できる場があってよいのではないか」という問題意識を日頃からもっていた。

③子供の達成等：複数の友達を自ら誘い、グループを組んで「新しいクラスマッチの形」という企画を提案し、学年全体での投票の結果、その企画は学年で最も高い評価を受けた。単に「目立つ発表」ではなく、「やってみたい」「学校が楽しくなりそう」と感じられた点が支持された。3学期末には、この企画を基にした学年クラスマッチを実際に実施する予定である。

Type II-c: 特別活動



①意図・工夫点：生徒会役員の公約であった「異学年交流」の実現に向けて、全校生徒を1～3年生混合の16グループに編成し、各グループに教員1名を配置した。年間テーマを「共生」と設定し、各グループに一万円の予算を配分した上で、企画書作成、プレゼンテーション、承認という一連のプロセスを経験させた。

②子供の様子：①創造性や探究心が高く、ゼロから企画を立案・実行する経験を強く求めている生徒、②リーダーシップを発揮する機会を求めている生徒や、高い学習意欲をもち、先輩から主体的に学びたいと考えている生徒、③社会的関心が高く、地域や社会との関わりの中で自らの貢献を実感したい生徒を想定した。

③子供の達成：主な内容は以下の通りであった。
・地域貢献（松山PR、清掃ボランティア、地産地消、子供食堂体験）
・世代間交流（幼稚園、附属小学校、附属高校、福祉施設との交流）
・文化体験（郷土料理、異文化体験、留学生との日本文化交流）
・スポーツ体験（インクルーシブスポーツ、パラスポーツ）
「一期一会で出会った人が、自分のアクションに対して気持ちよく反応してくれる経験が自信につながった」「学校の外に出た学びは、将来につながる大きな財産になった」といった感想が得られた。

(5) オンラインを活用したメンタリング



<https://gtm.wgc.ae/>



<https://www.amgs.or.kr/common/sub2/sub1.html>




- ・オンラインを活用することにより広域で才能や個性を伸ばす指導や支援が可能
- ・長期的なキャリア選択への影響や女性参加促進効果、エコシステムの構築など（例えば、Stoeger et al., 2023）
- ・多分野で質の高いメンター確保が共通の課題

<https://eu-gate.jp/cms/cybermentoring/>

<https://kids-academia.com/>

(6) 継続的な相談と支援の事例 (本人・学校・学校外の連携)

 **教員からの相談**
通級の小学生 (中学年)。クラスにいる子供の特性とその支援の手立てに悩み、EU-GATEに相談。衝動的な行動や友達との関係に問題を抱えている。知識量が豊富であり、授業中にそのことを話し出すと止まらない。教員はそれについて褒めたい気持ちがあるものの、一斉授業で褒めてしまうとその児童中心の授業になってしまう。知能検査の結果は非常に高く、検定等も受験歴がある。

**EU-GATEメンバーが
チームで継続対応**

現状把握

当該児童の行動、思考、特性、教師の支援でうまくいかなかったこと、周りの児童との関係等の確認。家庭との連携。

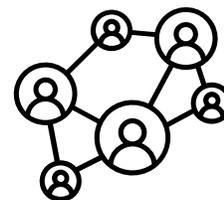
STEP
01



校内支援の提案

「今日の良かったところ」を教員間で共有。タブレット使用ルールに関する約束。帰りに振り返り時間の設定。得意分野をクラスで共有。

STEP
03



STEP
02

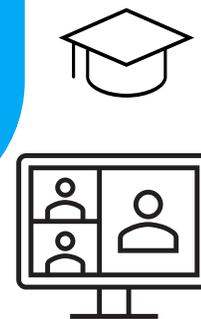
記録の共有

得意なことと苦手なこと、特性の整理。手先が器用。タブレットに依存傾向。時間管理が難しく衝動的な行動あり。放課後、落ち着いて教員と話す時間が大切。

連携による支援の実施

オンラインで、大学教員によるプログラミングに関する特別講義の実施。当該児童のそのような嬉しそうな表情は久しぶりに見たという感想。他にも関心をもちつつ児童が紹介される。

STEP
05



校内調整・試行・フィードバック

「自分ノート」は難しい。精巧な折り紙作りをクラスで披露し新たな友人関係を構築。得意なプログラミングを活かす方策の検討。



多様な才能を包摂する相談支援と柔軟な教育接続へ向けた方向性

第1に、入口の共通枠組みの整備が有効である。

説明・同意、児童生徒の特定に係る簡易プロフィール、相談を一体として位置づけ、認定を目的とせず、支援の見立てと継続性を担保する。これにより、学校内支援の調整と外部資源への接続判断が安定する。

第2に、出口（支援の選択肢）の整理・体系化が有効である。

学校内支援、学校外接続、継続支援、専門支援を整理することにより、教員研修・校内体制・外部連携の必要性と具体内容を明確化し、最適かつ実現可能な指導・支援へと接続する。

第3に、教育課程の柔軟化に係る運用基盤の確立が求められる。

連続的な教育課程の柔軟化に向け、指導計画、評価に加え、守秘と共有の設計を整備し、学校内外を往還する指導・支援の質を担保する。

特定分野に特異な才能に係るニーズの理解拡大（教員養成・研修）と多様な才能を包摂する指導・支援への導線を整えるための基盤が必要

※愛媛大学教育学部では、2019年より「才能教育論」を開講中。

2026年より大学院教育学研究科にて「才能教育の理論とデザイン」を開講予定

